

時の人々——吾人の祖先の意氣を壯とせざるを得ない。

翻つて、之を我國の現狀に見るに、吾人が呱呱の聲をあげてから、近き十五年間に、日清、北清、日露の三大外戦を経て、今や我國は、宇内の一等國と伍するに至つたといはれてゐる。吾人は其實否を審にしうる者ではないが、何れにしても今日は、高枕安臥すべき秋ではないと信ずる。所謂勝つて益兇の緒を締めねばならぬ。平和の競争、即ち智的方面の競争に於ては、彼にちほ數尺、吾數十丈のハンデイキヤツプがついてゐる様に思はれるのは單に吾人の僻目のみではあるまい。此時此際、吾人偶々眇たる謠曲「白樂天」を讀んで、今更ながら多大の教訓に接した心地がしたから、慙に秃筆を驅つてこの一篇を綴つたのである。吾人の文は拙劣だけれど、この曲の精神は、燦として千載に輝いてゐる。あゝ、龍南八百の健兒中、將來往吉明神の使命を果すものは誰であらうか。(完)

杜 樊 川

灼

愿

題して杜樊川と云ふ、心は樊川の詩的思想を照會して、其の詩中に現れたる人生觀を叙述せんとするに在り。敢て彼の履歷を細述して、其の詩人的奇行を記録するには非るなり。讀者其の心して讀め。

初唐及盛唐時代の——先覺者一度時代の末運に絶叫して太平に沈淫したる社會の懶眠を蹴破するや社會は凡ての方面に向ひて、最も深刻なる態度に豹變し最も眞面目なる人生の意義を求めんとす。是

に於て鬱積たる磊塊忽ち爆發して先づ以て現實を超越し歴史を全然破壊せんとす。此の間に起れる文學は暴風の夜の大火災の如く、凄暗たる焰は現實を甜め盡さずんば已まざるあり。酷烈ある筆鋒は過古思想の血液猶温き社會の心臟を一チ早く判らすんば已まざるあり。初唐時代の詩人は凡て是あり。魏徵五古を稱呼して、詩界別に一旗幟を立て痛烈ある筆を振つて時代の神經を激沸せりき。王勃は天折せり、且つ其の超然的性格は能く物外の情に靜然たり。故を以て與らず。斯の如き新時代思潮は社會の推移と共に變遷して、曩の酷烈は今の温順と化し。鋭き神經は温き血液と成りぬ。盛唐時代の詩は即此れ、多情瀉瀉として心霞の如く、一月柏葉の酒に酔い、二月春城の草に泣き、三月桃花の水に泛ぶ。歌へば即五陵の貴公子と云ひ、彩豊の娼家と戯る、又舊時の偉觀を、更に新潮の精髓なし。徂徠の六逸は太白を其の一に置く、其詩飄逸、想像の美は有れども人生の真相を穿つなし。情意の深且つ大なる者あれども、人情の極微を探らず。才は情に過ぎ、想像は意風に超ねたり、加ふるに直覺の妙味に乏し。杜少陵は才情太白に劣るは遠し、詩意切迫にして、憂心忡々たり、夜半にして耿たる燈火を望むが如く、情極りて想像に窮す。斧鉞の痕を留む苦作多し。太白戯れて曰く「借問舊時、太瘦生。爲總當年作詩、苦」と、灰謹の二句移して評に易ふべし。盛唐詩人之に雁行して晚唐の李杜に到る間、岑參の幽遠、王昌齡の凄艶、王建的自然的、李益の冷淨、共に絶句に名ありと雖も、詩想の小隘を病む。王孟韋柳の徒は、意徒らに長くして情味深からず、敢て冥想の幽趣無く、却て人情の玄美を逸す。韓門の孟東野は哲情理意悠々として、世に處して介然たり。其の詩、情に苦み意に飢れて晦玄奇澁、範と成すべからず。張籍は才情豊富と雖も構想平凡

抒情詩人の粹と云ふべきも、理想の高きを見ず。賈島は孟郊に似るも冥想的天才は劣れり。退之、孟東野を哭する詩に曰く「天ハ惜ミテ文章ヲ將ニ斷絶セシト。更ニ生シテ賈島ヲ繼フ文章ヲ」と、退之の心を讀むも、亦賈島は孟郊に若かず。李長吉は第一流の冥想派詩人あり、早くより哲學書類を耽讀して、苦作するや一詩に長時日を抛つ、削除自ら強めて、作る所の詩、悉く冥想の餘蘊に出づ、星辰日月、花鳥草木、覆載間の物、彼の眼に觸れ、彼の呼吸に接する所や、悉く皆超越的人格を具ふる靈性の發動なり、遠く宇宙を望んで深く内心の奥底に尋ね、觀て、大自我の表現と成す、謂へらく、月は何等か幽奥ある感情に刺衝せられ、宇宙を飛び人生の苦惱を傍觀して寒涙を零らす、此れ即ち夜間の白露あり。月桂の潤へる冷香は愛神の呼吸ありと感ず。彼が詩を讀む者、一讀して言外の意を覺ね、二讀して超界の神話的生活を味ひ、三讀して彼れ自ら神話中の一人物あるを感せしむ。杜牧評して曰く筆墨畦園の外に絶すと、語簡にして要を得たり。韓退之彼を好愛して其側を離さず、是ある哉長吉の才や。然りと雖も喁呬晦澁。理を窮めて人情に離る、天折して詩少なく稱す可らず。高適は五十にして詩を學ぶ、又韓門の秀才あり、曾て身を軍籍に置き又刀筆の迂吏たり。普く甘酸を嘗め。世故人情に通ず。其の詩躁ならず華からず、自然に發して人情に透徹し、調高くして倨侮ならず、老健の風自ら卓然たり。然りと雖も大詩人に非るなり。崔顥は見識無く、常建は才氣足らず、李涉因循、此の三詩人は尊ぶ可らず。蘇公曾て曰く白俗元輕と此二詩人の事、吾亦、何をか云はん。晚唐時代。——理想は時代の天に輝ける永遠の霞かり。捕へんとして捉うべからず。拂はんとして拂ふべからず。新時代には朝霞紅深く東天に匂ひ、衰滅時代には晚霞色重く西空に輝く。社會の事

何が善にして、何が悪なる、善悪は智者の懐に生ひ出でたる空々の語、唯、能く社會を糺弄する而
已、新時代に燭發せられたる良心は一チ早くも墮落したり。最も神聖ならざるべからざる時代の形
躰は白醅綠酒に中毒し、其が精神は黄金美色に浸蕩せり、先覺者は罪を社會に歸し、隱匿以て白眼
世上の人を睨みき。玄宗以後唐衰へ人情詩に倦みて弛懈せり。衰滅時代や文弱の餘弊流蕩して黄金
要無きに散せられ、惡魔は美の假面を蒙りて出現し、清き青年の血を吸ひ盡して、心の花園に毒を
吹き荒まんとす。時代は正氣を失ひ意氣沈湮し、眼に陵夷の態明に、衰滅の影黒きを看て、回復す
る勇氣を失ひ、晚唐時代即ち是あり。此の時代に現れたる、杜樊川は如何、李義山は如何。既に舊時
代の詩人を以て律すべからず。罪惡の墨は時代の天を染め盡したり、然も其時代は將に滅びんとす
多感多情學才優越の二詩人。覺醒の警句を吐かずんば已まざるあり。時代を蔽へる魔雲を搔破せん
と欲すれば先づ酷劇なる破壊主義の思潮汪溢する半面には、頗る創作の才に富み、且つ敏活にして
警拔ある時代眼を具ふる者を要す。義山の性格を觀るに、徒らに錦心繡腸の想ひを惱ますありて、唯
痛涙を呑んで時代を傍觀すのみ。亡滅の鬼火隱房に青く、黄金時代は其の戸を鎖して、燦爛たる光
明は夕の霞と共に消え失せぬ、而も、沈滞せる人情は、猶、過古の榮耀を夢想し、現實の憂ふべき
者には、依然として盲目なり、炯眼なき批評家は空しく李杜の名を傳へ、天才なき詩人は徒らに先
人の溺糞を嘗めぬ。時代の不幸兒として先天的命せられたる詩人は其不幸兒としての天職を盡さ
ず、敢て下愚汚俗の流に染溺して、血をく、骨なく、神經なき渾沌たる肉塊として、自ら其の存在
を非定し終んぬ。義山は唐の衰滅を愁ひ、巧麗文華の才筆時に深僻の事を用ふる者、何ぞや。王荆

公は形を看、冷齋夜話も遂に實情を穿つあし、詩眼に到りて義山の本領は始めて發揮せられたり、曰く俗學唯其の皮膚を見て、其の高情遠意を知らず、然り唐末を憂ふる詩人、銳意の人心を刺衝する無くんば、即ち濃艶の文、仄に之を寓す、義山の詩、豈に西崑の空言の如く然らむや、其の深僻は意有りて未だ及ばざるが爲而已。琴瑟及び樂遊原の詩、以て彼の性情と詩想とを伺ふに足る、今其の一を擧ぐ。

向チ晩意不レ行カ驅テ車登テ古原ニ夕陽無ク限リ好シ只是近シ黄昏ニ、只是近黄金の一句何ぞ其れ憂思長く何ぞ其れ正氣に乏しきや。時代の暗黒面に棲息して、豫言者として、鬱勃たる不平の心緒、明達せる直覺の大脳を具ね馳て時代の表面に奔騰する一大噴火山の伏魔線とありし者は誰ぞ。識る是れ、樊川明媚の地に生れ少壯薄倖を以て終りし美少年、杜牧之に非ざるか。

長安の一角、山長に青く、水常に綠ある所、昔、古豪傑樊噲の食邑たり。因むで樊川邑と云ふ誰か識らむ百世の後此の處晚唐詩界の霸王を出さんとす、彼の詩は樊噲の名、樊川の地と共に永遠に存すべきなり。

樊川の短生涯。——戀と深玄なる本牀の默示あり。運命の魔神が莊重なる歩みを運ぶ時、其の後に伴ふ不可思議の影なり。馳て毒ある劍を閃かして青年の心臓を貫かむとす。樊川蒲柳の質を提げて世の旅に出るや、凄慘たる黒風、先づ、彼を襲いぬ。家運漸く傾きて最愛の小弟肺を病み、生死の間、決然として起ち、滿腔の血を燃して世と戦はんとする時、彼亦病の人と成りぬ。然も戀は清く美き青年の心は黒く冷き影を投げぬ。而も、天稟の文才は彼をして一道の光明を認めしめ、文を

尙書に献て一躍進士第に昇る。多情の才人長く官游の人に非ず。翻つて當時を矚勝すれば、藩鎮の勢朝廷を壓し、五諸侯の兵蓬萊關下に逼る、樊川情激し、意逼りて兵を論する文數百十篇を奉る。上官明無く天子聾に似たり、用ゐられざるを見るや、多感の質、豪放の性、病弱の身を忘れ、一家の窮を棄て、朝廷を語り世を憤り、酒色に沈溺し詩歌に耽る、病身糸よりも細く、咳聲日夜に襲ひ忽ち、分司の御史を廢せられて、遠く江南瘴厲の地に貶せらる。彼の性行斯の如くして、猶ほ屈原が清節を學ぶ能はず、又、賈生が賢明を學ぶ能はず。一生の歴史に大汚点を印し、崇高あるべき人格を墮落せしめき。嗚呼情ある哉人。才人の末路や誠に風前の燈に似たり、曾て晚唐詩界に獨歩し李商隱、白樂天、元微之、を壓倒して、ローマンチック風の豪壯爽快の詩風を樹立せし、彼も、病を負ひ、望を失うて江南を去つて終に青山に入りぬ。時に年僅に三十有餘歲。蜀に遊んで太白を慕ひ長吉を鼓吹して自ら叙を作り注釋を試みしも果さず。交を世に斷ち、家に一老婢を置きて、僅に義山、等と書を以て交り。年五十にして死せり。死する時、炊竈の破れたるを看て不吉となし、又、夢に白駒皎々の四字を見、光陰の隙を過るなり我命盡きぬと嘆じて、作る所の詩書を燒き終に溢然として逝きぬと彼は終生正室を娶らず、妾を置きぬ、其の生める所の庶子も杜荀鶴は即ち作詩の巧麗を以て有名なる詩人あり。

茲に、樊川に對する古人の評を加へ、併て、其詩數篇を載せんに。

荆後村云、杜牧佳句自多於唐律、中常寓少拗峭。以矯時弊。

徐栢山云、杜牧之用事多不審觀者考之

胡宮溪カ云。杜牧之題詠。好_レ異_ニ旅人_ニ云々。

王荆公云。杜牧之カ之詩。好_レ異_ニ於人_ニ。其間。有_ニ不_レ願_レ理_テ處_一。

要するに、杜牧之の詩も、事實を離れて架空に走り、辞意高古にして、情旺邁して、意を言外に詭すること多し、今、樂遊原の一絶を挙げ、義山に對せしめ以て、其の性行詩想の異なるを知るべし。

長空澹々_{トシテ}孤鴻没_ス。高古_ノ鎮沈在_ニ此_ノ中_一。看取_ス漢家何_ノ事業_ノ。五陵無_ニ樹_ノ起_ニ秋風_ナ。

又唐の衰亡を嗟ぎて、

煙籠_ニ漢水_ナ月籠_レ沙_チ。夜泊_ニ泰淮_ニ近_ニ漁家_ニ。商女不_レ知_ラ亡國_ノ恨。隔_テ江猶唱_ニ亡國_ノ歌。

樊川の人生觀。眞個の人生觀は、最も純潔あるエンヤエルの懷に受胎せられ、極めて鋭敏なる神經によりて、感得せらるゝ簡單ある眞理の連鎖からざる可らず。此の点に於て、詩人は最も眞面目なる人生の解決者なり。詩は人生觀の斷片なり。自然の最愛兒にして、自然に對して最も大膽ある勇士あり、其の神經性にして多感質たるや、宇宙の俗塵一度其眼を遮る時、彼は電氣よりも劇き勢力を以て、之に感應す。自然の默示一度其の心に觸るゝ時、彼は早くも之を感得して内界の情に訴ふ。フイヒテの哲學を讀む者は彼と共に理性の直道を邁往して主觀的自我の實在を洞觀せざる可らず。樊川の詩を讀む者は彼と共に感情の軌道を運行して、彼の人生觀に現れたる眞理の世界を讚美せざる可らず。詩は言外の情を尊ぶ。古人曰く「詩は志の之く所あり、心に在りては志と爲し、言に發しては詩と成る」と、樊川の詩を讀む、當に、此の心を以て讀むべし。

樊川は唐詩人中、最も、多く哲學書類を耽讀し、最も能く之を咀嚼したる者あり。詩中引用する處

楚辭を以てし、孔孟を以てし、又多て老莊、荀子、列子、韓非子、淮南子、（註）に由れり。然れども歴史に於て審みざるが如し。後學、彼の詩を注する者、其の舒事詩に到りて、引用せる故事の誤謬錯誤の爲め最も窮し。其の抒情詩に於て引用せる故事の出所、頗る明晰なるに依りて自註し易きを覺ふと。彼の詩は李長吉の如く人情に離れず、李太白の如く人生問題に不熱心ならず、而も彼孟郊、狷介の性に非ず、又、王建、繚綺の質に非ず、怨むらくは杜少陵の道徳心に缺けるを。彼、小杜と稱せらるゝも老杜の如く人格秀美ならず、史詩に長せず且つ、其の詩風も霄壤の大差あり。唯時人の斯く稱して老杜と區別せるが如し。豪邁の詩情、古今を併呑して時勢に拘泥せず、貴貧上下を忘却し、彼自身をも忘却して宛然大自我の表現たり。彼はニーチェの超人を實現せる大詩人に非るか、然りと雖も彼は終生悶々の情を解し能はざりしなり。即ち豪邁の詩情、裡に言ふべからざる凄慘悲痛の情を含むは彼の詩の特徴あり。

彼の人生觀は要するに、世界多苦説あり。彼には終始一貫せる人生觀あり、唯、物に感じ情に動いて詩となる者悉く人生の斷片たりしあり。然れども精細に讀み來る時は自分一つの人生觀は受胎せらるゝを覺ふ、即ち、世界は苦痛あり。曰く、事を省くは却て事を多くする方に囚り。心無くして來るは飄つて心有りて來れるに似たり。人生は凡て矛盾あり、甲に非ずんば乙に附く。江山暗に人を換へ、鶯花潜に老を運ぶ。人生僅に五十のみ。何を苦んで、故に、煩簡の法を作らむ。口懷表裏を成さむ。是非を忘るゝ者は幸福あり、何者、苦痛無きを以てあり。苦痛は罪惡なり、罪惡は他に非ずして自我に存ず、自我内に在りては悶々の情と成り、外に發しては、名譽心、利己心となる

官瀛を事として名譽の奴隸と成り、自由を失い、束縛を受け然も政界の濁流に溺る、利己心は黄金を積み榮耀に耽らむとす、君知らずや、人生は其の内に落ち、過如として霹靂急あることを。人生は一樹一枝の花の如く、同時に開いて、同時に落つる時、片々として殿上に落つる者之を人に諭ふれば殿上人あり。片々として溷糞の間に落つるもの、之を譬ふれば百姓なり。元是れ、同根より出づ。空なる人生が求めて階級を建てたるもの。其實は同一の資格なり。殿下豈に尊からむや、百姓豊に卑しからむや。此れ運命あり、「國の孟子を要する無く、人の仲尼を毀る有り」。運命には孔孟も敵する能はず。「地頑にして歴すれども穴せず、天遙にして老いて僵らず」、唯、弱きは人なり。階級の前には屈せざるを得ず、老ゆる時は死なざるを得ず、生人は但、眠食して死を待つのみ、而も世縁多累にして悲みを生じ易く。唐滅びんとして曾て獨醒の人に逢着せず。此の思想は彼をして始皇を忌遠して、漢の文帝を戀はしめ、惟へらく、人生は自由の裡に胚胎して、自然に復歸する者なるを何者の愚か、平等を汚して、個人の樂に耽る。即ち曰く徳を以て人を化す漢文帝と、又、始皇を怒つて、黔首愚ならず、爾、益々愚なり。此の感情は延いて當時に移り、醜酣更に唱ふ太平の曲仁聖の天子壽疆り無し、當時の天子幼愚なり而も之を云ふ、惡謔、堪わざらしむ。彼れ若し革命時代の佛國に生れしならば、必然、大ルーソーと成りしならん。彼は終に自暴自棄の人と成り、進んで社會を嘲罵し、人生を惡謔せんと欲しぬ。曾て人生を怒つて曰く、身世兩ながら忘れん者は、蓬蒿三畝の居のみ。一天下に寛く、酒に對して敢て酌まず。黙して元相と語れば、人生自ら不足。愛塵遭逢寡なし。と又曰く酒に溺れ、色に耽るも決して道德に反馳せず、道德は階級が假面を蒙りて現

れたる生命なき法文に過ぎず、眞の人生は徳夫れ自身あり。偽善の徒たらむより、本體の冠たらむ方、寧ろ勝れり。曾て會心の詩人孟暹と語りて曰く。喜極まりて無言に到り。笑餘りて却つて、悦ばず。人生直ちに、百歳の翁と成り。亦是れ万古一瞬の中あり。我は東、龍伯翁を召して、天に上りて、北斗の柄を掲取せんと欲す。蓬萊の頂上、海水を幹く。水盡きて底に到りて、海空を看ん。月は何の處に去り。日は何の處より來る。跳丸相趁走して住まらず。堯舜禹湯文武周孔は皆灰と爲る。君に酌す一杯の酒。君と狂して且つ歌はん。離別豈に此れ更に意に關せんや、衰老相隨ふを奈何す可ん。尋常世上の人の離別に用ふる浮薄なる哀辭を語らず。別離を嘲つて、人生を怒り。眞情を縷述して、自ら眞を得たり。即ち彼は生を輕するは、元性を惜むに非ずと信じ、酒を飲み、色を漁りて、自己をも社會をも忘却く、閑人我に似て世間無しと叫び、

且く、苦痛を離脱すべし。眞面目に無意義の社會に生息せんと欲すれば、吾人は到底、苦痛に堪はず、孟郊の褊狹、阮籍の狹愚を學ぶを止めて、正面より堂々乎として、社會の虚誕なる道德を破壊して、赤裸々たる人生を表白せよと。ニーチエ、晩年狂死せり。彼も益々大なる煩悶に陥りぬ。曰く、「己に身、自ら、曉らず。此の外、何を思惟せむ。」と犇牛曰く、吾に悟りかし、吾に宗教なしと。才人の末、亦斯の如き乎。

性は生なり。弱い哉人生、エーチエも永遠の力を破る勇あり。小町姫も運命の心を説くに由なし時は、形なき鬼よ。氷れる劍を握りて。吾等に死の判決を預言す。空間は怪しき魔よ、美しき愛の假面を冠りて、吾等の弱き心を欺く。吾等は自然の兒たらんとて生れしが、將、運命の玩具なら

むとて生れか。如何なる自尊心も、權威ある宇宙の前には扞屈く。如何ある依頼心も無情ある自然に對しては失望す。人生、遂に煩悶の兒たらずんば、醉生夢死の俗而已。宇宙の劫久にして此の生の須臾を惟ふ時、誰か寂寥を感せざらむ。這般の厭生思想は古代詩人を経て、樊川も遂に寂寥の牢獄に鎖されぬ。昔、瀟灑たる美少年、深窓の裡、温き空氣に包まれて、遠く社會を望みし時、想像雲の如く集り、漫々たる希望を社會に属し、然も蒲柳の質、秋には風を恐れ、春は落花を痛みぬ不識、何の處の鬼か、此の美人を奪つて、佛教を味ひ、老莊を解せしめたる。青雲の志未成らずして、樊川は病の身となり、失戀の人となり。薄倖の名を買つて、奈落の底に追ひ下されぬ。彼の詩の悲觀的ある必ずしも無理あらじ。且つ、彼の人生觀は西洋哲學者、又は詩人に求むれば、敢て嶄新、珍奇の者に非すと雖も、由來保守主義の頑固黨多數ある支那思想界に、孔孟の熱盛ある唐時代に輩出し、老莊儒佛の間に入出して、所謂、仁義禮智を御茶の子と心得、世間を呑むで孔孟を諧謔して、社會の惡評罵詈に對して馬耳東風たる樊川を思はずや。又、一氣風を具へたる男兒に非ずや吾れ黃吻兒、自ら強うする而已、豈に古人の糟粕を嘗めむや。若く夫れ、樊川豪宕の霸才、邁往の詩情を奪い來つて、現代軟弱の文界に注入する時、吾人は必ずや、文學の良心を鼓舞し。時代の精神を覺醒する者あらむことを信ず。吾、豈に本箱先生からむや、焉ぞ、縁を紙魚に結んで、徹臭き古文字の虫干を爲さん。吾れ道學先生に非ず、焉ぞ、孔孟の糞尿を嘗めて、安心するを得ん。吾れ村夫子に非ず、焉ぞ、文字の末に拘泥して古詩歌の注釋を成さん。吾は、本箱の内容を知らむとする者あり、孔孟の言を聽かんと欲する者なり。詩の神髓を讀まんとする者。吾に於ては、總て

此れ他山の石、以て此れ是れ玉を磨くに足る、而已。

現代の學界を觀るに、吾人は、餘りに兀々先生の多きに堪わざるあり。兀々たり、録をたず、而して人生の意義を解く得るか、自然の真相に透達し得るか。吾人は人生の神髓を發揮せんが爲に、道學先生を氣死せしめ、村夫子を憫殺し、兀々先生を放逐して、茲に、最も深刻なる人生觀を描出せる文學の絶對的尊位を建設せざる可らず。然るに、現代文學は浮薄、虚誕なる戀を描き、下俗なる人情を寫して將に、尊嚴なる人生を擧げて、悉く、爲永春水の材料たらしめんとす。斯の如くして個性の尊嚴を何處に求め、人生の眞意を何處に解せんとするか。社會が如何に紊亂し、人心が如何に沈湮するも、各個人が自覺を失はざる以上は、眞摯なる人生觀は、必ず要求せらる、此の機微を捉へて文學は始めて其の權威を有する者あり。今日の小説、詩歌が青年靑女の讀み物なる限りは、彼れ等に於て最も重要なる人生問題、即ち戀を描く可きは當然あり、此の点に於て、戀は文學の生命なり。然るに彼等は青年に同情せず、青年の歡心を買ひ、青年を迷はさんが爲に戀を描けり。知らずや。戀は妖魔が巧に美を紛裝して現れたる、不可思議の實在あり。彼等は此の偉大なる實在を看破することを教わすして、途に迷へる青年に服従せよと強ふる者あり。吾人の理想は、先づ以て、軟弱の文風を一抛して、文界に一道の正氣を吹鼓するに在り、